日本ウィニコット協会　Newsletter

Vol.6 2021

目次

ウィニコット・フォーラム 2021「ウィニコットの臨床と家族」 1
リレーコラム「ウィニコットの反社会的傾向について」　（工藤 晋平） 3
リレーコラム「音楽家ウィニコット」（館 直彦） 5
大会印象記　Winnicott: A Present for the Future（増尾 徳行） 9
協会からのお知らせ 11
編集後記 12

ウィニコット・フォーラム 2021

「ウィニコットの臨床と家族」

Covid-19 の感染状況を鑑みて、昨年度に引き続き、ウィニコット・フォーラム 2021 もオンライン形式で開催させていただくことになりました。本来なら、直接皆様とお会いして学びを深めあいたいところですが、対面開催は来年度以降に期待したいと思います。

Covid-19 の蔓延は、改めて、人と人との繋がりに光を与える機会になりました。心の支援に携わる私たちは、人が一人で生きていくことの難しさを知っています。孤独や不安、悲しみや苦しみにもちこたえ、前を向く勇気と力を手にするために、この「こころとこころの繋がり」が果たす役割は少なくありません。

今年のテーマは「ウィニコットの臨床と家族」です。家族は繋がりの原初でありながら、最も大きな苦しみをもたらしかねないものでもあるのでしょう。そして改めて述べるまでもなく、精神分析の描くこころの世界は、エディプス・コンプレックスをはじめとして、家族の中にあります。今年度のフォーラムでは、ウィニコットを共通言語に、改めてこの「家族」という複雑で多様な問題について思索を深め、自由なもの思いを刺激できるような場をご用意したいと思います。

年末のあわただしい時期の開催ではありますが、多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

記

日時：2021 年 12 月 26 日（日）10:00～16:10
会場：オンライン

プログラム
10:00~10:05　大会長あいさつ
　　吉村 聡（上智大学）
10:05~12:30　**シンポジウム「ウィニコットと家族」**
　「ボウルビーの見た家族，ウィニコットの見た家族」　工藤 晋平　（名古屋大学）
　「「ピグル」と「家族」」　岡本 亜美　（個人開業）
　「ウィニコットの家族臨床について」　飯島 みどり（慶應義塾大学）
　　指定討論：奥寺 崇（クリニックおくでら）
　　話題提供者およびフロアとの討論
　　司会：加茂 聡子（四谷こころのクリニック）
　　稲員 修平（川谷医院）

12:30~12:45　総会
12:45~13:45　休憩

13:45~14:45　**講演**
「現代自己心理学と間主観性理論が導く養育者－子ども相互交流の理解」
富樫 公一（甲南大学）
司会：吉村 聡

15:00~17:00　**パネル　「「子どもの治療相談面接」をめぐって」**
「子どもの治療相談面接」概説　大矢 泰士（東京国際大学）
現代クライン派理論との交錯　西 見奈子（京都大学）
どこまで近づき，どこで問うのか
―可能性空間における距離感、メンタライジングにおける距離感―
菊池 裕義（駒木野病院）
司会と討論：妙木 浩之（東京国際大学）
吉村 聡

17:00　閉会の辞　吉村 聡

リレーコラム

ウィニコットの反社会的傾向について

名古屋大学学生支援本部／心理療法室ともしび／NPO 法人風の家　工藤 晋平

このコラムを書いているのは、家族心理学会のシンポジウムで発表を行った後になります。シンポジウムのテーマは『「加害者と家族」をめぐる心理臨床』というもので、家族（というよりも養育者という二者の関係）がどのように心の成り立ちに組み込まれ、それが犯罪に至る心の状態の一部を形作っているか、心理療法というものが目指しているのはこの軛から自己が解き放たれることであること、そのことは翻って家族に葛藤を生じさせ、そうでなくとも家族の誰かが加害者となることは家族にとっての危機であり、こうした家族のケアを誰が行うのかということが問題となることを話しました。

コラムの執筆に当たってこのような話をしている理由は、ウィニコットもまた、反社会的傾向と家族について述べていたことに触れたいと思っているからです。ウィニコットは子どもの情緒発達に生じる病理として、精神病、反社会的傾向、神経症の３つを並べました。精神医学的な診断としては、２つです。自己というユニットが成立する前の絶対的依存の段階での環境の失敗がもたらす精神病、自己というユニットが成立した後のアンビバレンスを所有することができ、それに苦しむ（ことができる）神経症です。これに対して、反社会的傾向は自己の成立がある程度なされた後、かつてあった愛情の剥奪に端を発し、今や憎しみを（所有することで）抱く（ことができる）ようになった（がゆえの）問題として定位されています。これは診断ではなく性格の障害として位置づけられ、個人の傾向として捉えられています。

なぜ反社会的傾向だけは診断とならなかったのか、という疑問は解決を待っています。しかし、そもそも、日本ではこの反社会的傾向の議論そのものがまだ紹介されていないように思います。ウィニコットが盗みと破壊性に関して、ここに何の剥奪を見ているのか、反社会的傾向が希望であるとはどういうことか、治療において何が提供される必要があると述べているのか、ということはあまり知られていないでしょう。あるいはこれを実践の中で使用している人はごくわずかではないかと思います。

このことは、そのまま現在の日本の精神科臨床、心理臨床の中で、子どもの反社会的傾向がいかにそれとして取り扱われてこなかったか、子どもや青年、大人の非行・犯罪の問題がいかにそれとして論じられてこなかったか、そのような形で「再度」剥奪が現実化してきたかということを表しています。司法・矯正などのごく限られた領域を除いて、非行・犯罪は見えない問題となっているように思います。たとえば、精神分析学会で非行・

犯罪、ないしは犯罪性がテーマとなったことがあるか、というようなことです。このような現実認識とともに、これがなぜか、という疑問も解決を待っています。

イギリスでは犯罪の問題を抱えた個人のための司法心理療法のモノグラフがシリーズとして出版されています。これを監修している Brett Kahr は、最近翻訳が出版されたウィニコットの伝記『ウィニコットとの対話』（人文書院）の著者でもありますが、多作な精神分析的心理療法家です。歴史家としての訓練も受けている人物ですが、その著作の１つに『Dangerous Lunatics』という犯罪について書いた本があります。といっても、この中では「本物の」犯罪が扱われているわけではなく、誰の心にもある犯罪性、準犯罪性（sub criminal）について述べられています。例えば自殺企図を繰り返す親に疲れて眠っているうちに親が本当に死んでしまった子どもは、親を殺したと言えるでしょうか。つまり、これは犯罪でしょうか。逆に、子どもは無垢でしょうか。眠ってしまったことの中に親の死を願う無意識的動機を見ないということはあるでしょうか。こうしたしばしば起こりうる、犯罪性について提起する簡易な書籍です。

こうした準犯罪性は実のところ、様々な臨床の場に観察されることではないかと思います。最近になって非行や犯罪は司法・矯正の限られた領域を超えて心理的治療の対象として見なされるようになってきています。しばしばそれは、精神科における依存・嗜癖の問題という範疇に収められますが（性犯罪、薬物事犯、常習窃盗）、これも精神科に限定される問題ではありません。よくよく観察してみれば、こうした犯罪性はあちこちにあることが気付かれるでしょう。精神病が個人の心の成り立ちの障害だとして、神経症が個人の心の中の障害だとして、犯罪性は個人の苦しみが社会への恨みとして展開する、個人と社会の境界線に生じる病理です。犯罪性など扱う必要もないほどに犯罪に縁遠い社会であれば、それは何よりであるに違いありません。けれども、人間には反社会的傾向が備わっていて、あるいは人間の社会には確率論的に反社会的傾向を備えた人が現れます。そうだとすれば、もう少し犯罪性や準犯罪性の議論があっても良いし、反社会的傾向に取り組んだ人物としてのウィニコットと、その議論がもう少し紹介されても良いだろうにな、と思っています。

リレーコラム

音楽家ウィニコット

会長　館　直彦

音楽が人間の情緒生活にとって大変重要であることは誰もが理解していることだろう。実際、私たちの生活は音楽にまみれていると言えるかもしれない。しかし、音楽について、正面から精神分析的に検討したものはこれまでそんなに多くはなかった。もっとも、最近になって、Roger Kennedy の The Power of Music などが刊行されているので、少しずつ着目されるようになっていると言えるかもしれない。

音楽について精神分析的に論じたものが少ないのは、Freud の所為だろうか。Freud が音楽に近づくことを忌避していたことは良く知られている。学生時代に、妹が家でピアノを練習していたのを煩いと言ったところ、即座に家からピアノが消えたのは有名なエピソードである。しかし、彼はウィーンで生活し、駅でトゥーン伯爵の姿を見かけて、モーツアルトの『フィガロの結婚』のフレーズが口から出てくるような人である。また、作曲家マーラーの相談に乗ったエピソードもあるし、指揮者ブルーノ・ワルターの分析も短期間ではあるが行っている。彼は、音楽が嫌いだったのではなく、音楽が自分の思索を妨げると思ったのだろう。音楽に取り組むことは情緒に取り組むことにつながるのでたいへんなことになる、と思ったことも、音楽を避ける理由だったかもしれない。

Winnicott の場合はどうだろうか。彼があちこちで文化や芸術の価値を称揚し、芸術作品について言及していることは皆さんもご存じのことだろう。『遊ぶことと現実』全体にそのような傾向が見られるが、特に『文化的体験の位置づけ』や、『私たちの生きる場所』といったエッセイは、芸術や文化を、私たちの人生の中核に位置づけようとするものである。その他のエッセイでも、例えば、『創造性とその諸起源』の中ではシェークスピアの『ハムレット』のジレンマが論じられているのは有名だろうし、『子どもの発達における母親と家族の鏡－役割』の中では同世代の画家フランシス・ベーコンの作品が論じられている。音楽にも当然のことながら、関心が向けられている。

彼はテノールの美しい声を持っていて、若い頃はコーラスなどで良く歌っていたことが知られているし、ピアノを弾いていて、セッションの合間にしばしばピアノを演奏していたと妻の Clare は書いている。全集には、彼がリコーダーを吹いている写真が掲載されている。

また、バッハの『ロ短調ミサ曲』の演奏会に行けば同僚に遭うことになるだろう、といったことが書かれていたり、ベートーベンの後期弦楽四重奏曲が好きだということが述べられていたりする。そういうことことから、彼が音楽をとても愛好していたことは伝わってくる。もちろん、ビートルズも聴いていた。

ところで、彼が音楽について語っているもっともよく知られている言葉は、『子どもの治療相談面接』の序文にある一節だろう。それは、精神分析的なセラピーについてであって、「私の立場は、チェロ奏者にたとえることが出来るでしょう。チェロ奏者は、先ず、最初は技術を身につけるために努力し、それから技術は当たり前のこととして、実際に音楽を奏でられるようになるのです。」という一節である。私は読むたびにドキッとするが、音楽とは何だろう、音楽としての精神分析とはどういうものだろうと考えさせられるのだが、音楽と精神分析に親和性があることを示唆したものと言えるだろう。実際、分析のセッションにおけるやり取りは声に出された言葉を介するものであって、観念としての言葉の意味だけを通したものではなく、まさに音なのだから、音楽に近いところがあることは否定できないだろう。分析的交流自体が音楽に近いということは出来ないだろうか。

そもそも小児科医から出発して、臨床で早期の親子関係を扱っていた Winnicott が音楽の重要性に気づかなかった筈はないだろう。親子の間で交わされる様々な音が移行対象となる場合があることを Winnicott は述べているし、母親の歌う子守唄は音楽的に抱えること（musical holding）だろう。そうした Winnicott の『出生記憶、出生外傷、そして不安』にある一節は、音楽の本質を衝いたものであると、イタリアの分析家 Civitarese は述べている（Sublime Subjects: Aesthetic Experience and Intersubjectivity in Psychoanalysis）。それは、「（生下時における）この救いがない感じには、いつ終わるのかについての知識をまったく持たずに何かを体験することの耐えられなさが含まれている。（･･･）基本的にはこの理由のために、音楽においてフォーム(form)が非常に重要になる。フォームを通じて、終わりは始まりから見えているのである。」という部分である。音楽とはいったい何であるか、ということは措いておくとして、音楽にフォームが大事であるということに異論が差し挟まれることはないだろう（「フォーム」を「形式」と訳してしまうと、少しニュアンスが違ってしまうかもしれない）。そして、音楽には様々な要素があるとしても、フォームにおいて最も重要なのはリズムとハーモニーである。音楽となるべきものが音楽となるためには、フォームが必要なのであるが、それは人間の本性とも結びついている、というのが Winnicott の主張である。メロディは歌なので、二次的なものとなるだろう。こういう一節を読むと、Winnicott は、音楽のことを本当に良く分かっているのだな、と思うのだが、彼の全集を眺めていると、あちこちで音楽についての言及が見られる。

フォームはリズムとハーモニーが中心となるが、ここでリズムについて、もう少し考えていきたい。リズムは反復であるとともに、運動でもある。Winnicott は、エッセイ『私たちの生きる場所』の冒頭で、インドの詩人タゴールの詩の一節「果てしない諸世界の海辺で、子どもたちは遊ぶ」を引用しているが、波はリズムであり、反復されるが、しかし

決して同じではない。むしろ、常に変化していくものである。私は、最初にこのエピグラフを読んだ時は、何故これが冒頭に置かれているのかが良く分からなかった。遊ぶことについて、創造性について書いてあるエッセイなのに、この詩にはある種の哀しみの痕跡が見られると感じたからである。その後、少しずつ理解できるようになったことは、遊ぶことの多くの繰り返しの裏で、現実は錯覚を通して回避されているということである。そこにはやはり微かに哀しみの匂いがするからこそ、遊ぶことの本質を捉えたものとして、ここにタゴールが引用されたのであろう、ということである。これは音楽にも当てはまることであるが、音楽も多くの繰り返しがあり、現実であって現実ではない移行的なものであるからである。そういえば、音楽を演奏するのは、play music なのである。私は、遊ぶことの例として、音楽ほど適切なものはないのでないか、と思っている。実際のところ、通常の遊びよりも、はるかに遊ぶことの本質を衝いているように思う。そのうえ、こうしたリズムは、波のように、時間の中にあって、流れていくものであるが、リズムを通して時間の線形性は破壊されることもある。ときには時間が止まっているように感じられる瞬間もあるだろう。音楽には、このようにフォームがあるのである。

ところで、Winnicott は、遊ぶこと、あるいは遊びについての初期のエッセイでは、「遊ぶことは快である（play is pleasure.）」と強調している。確かに、傍から見ると、子どもたちが遊んでいる姿は楽しそうである。しかし、既に述べたが、遊ぶことは、現実の痛みを、より耐えやすいものに転換させるためのものでもある。遊ぶことは錯覚であり、本当に現実の痛みがなくなるわけではない。そのように考えると、遊ぶことは本当にそんなに楽しいものなのだろうか。Winnicott 自身も、後期になると、「遊ぶことは快である。」とは言わなくなっている。痛みが実際に消え去っているわけではないのに、遊んでいることはマゾヒスティックな行為と言えるかもしれない。

リズムに関しては、Freud が『快原理の彼岸』で触れている。彼は、それまでの緊張が不快であり、弛緩が快であるという快-不快が量的要因で決まるという考えを改めて、リズムが重要であるだろう、と着想している。しかし、彼はその考えを発展させることはなかった。『快原理の彼岸』の中で、誰にとっても印象的なのは、やはり Freud が孫の Ernst が、糸巻で遊ぶのを観察している場面だろう。Freud はそれを反復強迫と捉えて、そこから快原理（pleasure principle）を超えたものとして死の欲動を抽出していく。Freud は、この遊びを、本当は不快なことなのにそれを繰り返していると捉えて、反復強迫と理解していくわけであるが、ラカン派では、Ernst が発した声に注目して、Freud とは異なった理解を展開していく。私は、Ernst が（内心、本当のところ、不快だったとしても）遊んでいたこととそれを楽しんでいたことに注目したい。Freud の死の欲動論に対して、Winnicott はここから遊ぶことの理論を展開していくのである。その点で、Winnicott だって『快原理の彼岸』は読んでいるはずなのに、どうして Ernst の糸巻き遊びに触れないのだろうか、とも思う。これは彼の舌圧子ゲームとよく似ているからである。

これは今のところ、私の想像に過ぎないが、Winnicott が死の欲動論に強く反対したことはよく知られているが、彼の書いているものを読んでいると、彼が反発しているのは、ク

ライン派の、死の欲動のあらわれが羨望であり、それが破壊性や攻撃性に結びつく、という考え方である。彼は、死の欲動論は、既にリビドー論に含まれているので、必要ない、と述べる。むしろ彼は、Freud の考えのルーツにある人間の寄る辺なさ（Hilflossigkeit）や涅槃原理に親和性がないわけではなく、同じ様なことを違った表現で述べているだけのように思える。彼自身がそういう表現をしている訳ではないが、快原理の彼岸にあるのは死の欲動ではなく、遊ぶことである、というのが Winnicott の考えなのではないかと私は思う。だから「終わりは始まりから見えている」のである。

私は、Winnicott の遊ぶことの理論は、快原理を超えた、彼なりのメタサイコロジーであると思うが、それが可能になったのは、Freud と違って、Winnicott が音楽を避けなかったからでないかと考えている。彼は音楽を避けなかったばかりでなく、むしろそれを通して自分の理論を練り上げていったのでないかと思う。その際に、分析的な出会いが、そもそも一面では音楽的なものであると理解することが、分析とは何かということについての Winnicott の考えを深めるうえで有用であったのでないかと私は考えている。

大会印象記

The Squiggle Foundation 主催 Winnicott: A Present for the Future （2021.9.25－26，オンライン開催）

ひょうごこころの医療センター　増尾　徳行

The Squiggle Foundation の主催する Winnicott の没後 50 年を記念するカンファレンスが、ロンドン時間の 2021 年 9 月 25 日から 26 日にかけて、オンラインで開催されました。彼は 1971 年 12 月に亡くなりましたが、その 50 年後にあたる 2021 年 1 月に開く予定だったものです。しかし 2019 年秋に始まった Covid-19 の感染拡大は、英国ではロックダウンを伴う惨事でした。患者と会うことで成り立つ日常臨床は、一変しました。主催者は、開催延期をすぐに決定しました。のちにオンライン開催にすることも、告知されました。

この節目に Winnicott による思想の深まりや広がりを捉え、多くの人が交流することで、「未来に向けた現在」としよう、というのがカンファレンスの目的です。

カンファレンスには、精神分析家をはじめとするこの領域の専門家が、世界じゅうから 300 人以上集まりました。プログラム全体は、主催者が提供する 4 本の講演と討論、そしてパラレルセッションとして同時間帯に並行して行なわれる 11 の講演と討論とで構成されていました。それぞれのセッションで、興味深い講演と濃密な議論が行なわれました。

最初の演題は、Winnicott 全集を編纂した Caldwell 先生による「自己そして他者と交流すること・しないこと」でした。おそらく当初の原稿にはなかったはずの Covid-19 に触れるもので、交流する／しないの切れ目をより際立たせる講演になったと思います。それに続く討論も、経験的な痛みに根ざした深い討論となっていました。

カンファレンスのあちこちで起きる議論を聞いていると、「未来に向けた現在」というカンファレンステーマが、リアルなものとして感じられる気がしました。そこではたしかに、Winnicott が生きていたのです。顧問の Casement 先生が当協会の創刊号で触れてくださったように、彼が追従者を望まなかったということを私たちは知っています。でも息遣いのようなものが、共有されているのだと思います。

当協会は、その Casement 先生の紹介で、設立当初から財団とコミュニケーションをとってきました。その縁で、財団は早くから、当協会にカンファレンスへの招待とともに、出講の依頼をしてくださっていました。当初は会長の館が発表する予定だったのですが、諸般の事情により私がパラレルセッションのひとつで話をしました。

セッションでは、Transitional objects and translational phenomena と題する講演をしました。移行対象概念をめぐる Winnicott のことばづかい、日本語・フランス語の辞典に現れる定義、彼の著作の翻訳に現れる差異に言及しました。参加者はコロンビア、イタリア、ネパール、中国など、英語を母国語としない場所の人たちが多くいました。さまざまな地域そして分野で、Winnicott の思考を理解し、伝え、臨床に生かすところに生じる難しさを共有する場になったと思います。途中オンライン特有の問題も発生したのですが、司会だった Abram 先生が、適切に差配してくださいました。

今後も財団とは、コミュニケーションを保っていこうと考えています。もし会員のみなさんに協働のアイディアがありましたら、お教えくだされば、と思います。

協会からのお知らせ

研修会・協会共催事業のご案内について

日本ウィニコット協会では，ウィニコットおよび独立学派に関する研修会や，協会共催事業を会員の皆さま宛てにご案内させていただいています。

つきましては，会員の先生方が主催されている研修会などで，会員の皆さまにご案内したい内容がございましたら，協会事務局宛てにメール【jwasecretariat@gmail.com】にてご連絡ください。理事会にて審議の上，承認された場合，協会ホームページの「研修会情報」への掲載と，メーリングリストでの配信をさせていただきます。

なお，メールの件名を「研修会（協会共催事業）掲載希望」とし，本文に研修会の詳細をご記入ください。フライヤーの画像データや PDF などがあれば，そちらも添付していただければ掲載いたします。

編集後記

私は協会 HP の管理もしているのですが、先日、ウィニコット・フォーラム 2021 大会長の吉村先生より、定員を 150 名から 200 名に変更するよう依頼がありました。なんとも嬉しい依頼だなと思い、早速作業を行いました。

私は学会・研修会への申し込みを後回しにしがちで、フォーラムも例にもれず。作業を終えたその手で慌てて参加申込をしました。吉村先生からの依頼がなければ定員オーバーで参加できず、歯噛みするところでした。

会員の先生方のお手元に、抄録が届いた頃だと思います。私も「まだかな？まだかな？」と（少し早いですが）アドベントカレンダーを眺めてはそわそわする子どものように抄録を眺め、当日を待とうと思います。

次号は、早春の発行を予定しています。

寒さが日一日と深まってまいります。どうぞお身体ご自愛ください。

（奥田久紗子）

2021 年 12 月 13 日発行
日本ウィニコット協会　Newsletter vol.6

編集：石田　拓也
　　奥田 久紗子
発行：日本ウィニコット協会

日本ウィニコット協会事務局
e-mail：jwasecretariat@gmail.com
HP：https://winnicottforum.com

〒543-0001
大阪府大阪市天王寺区上本町 6 丁目 6-26 上六光陽ビル 601
たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内